

聖燭祭

(光の祭り) は2月2日(金)です。フランス語ではシャンドルール(chandelier)、オランダ語ではリヒトウミス(lichtmis)といます。

祭りの名前の起源は、ろうそく(chandelle)から来ています。時をさかのぼってローマ時代に、ルペルクスという神をたたえるため、信者は松明(たいまつ)を持ってローマの街を歩きました。その後472年に、教皇ゲラシウス1世がこれをキリスト教の行事に結びつけ、キリストの生誕から40日目に当たるこの日をイエスを祭る日としました。信者がろうそくを持って教会に行き、ろうそく火をもらい、神からの祝福として家に持ち帰りました。このろうそくのろうを卵にかけると卵がうまく孵(かえ)る、雷雨時にろうそくを灯すと雷から守られるなど、フランスの地方ではさまざまな言い伝えがあります。

時代の流れに伴い、別の風習とも結びつき、この日に家族でクレープを焼いて食べる習慣が根付いています。人類の光であるキリストにこのクレープを捧げる、という思いが込められており、聖母マリアが産後のお清めの後に最初に食べたのが、このクレープだったそうです。クレープの色・形が太陽に似ている、長い冬が終わり春の訪れを告げる、など諸説の言い伝えがあります。



春の到来を祝うカーニバル(2月13日マルディグラ)も間近。1年間の家族の健康をお祈りしましょうという考えは、どの国にもありますね。幼稚園や小学校でも生徒がクレープを焼いて、先生と一緒に食べている光景がみられます。クレープを焼くときに、左手に小銭、右手にフライパンを持って、うまくクレープをひっくり返せれば、その年は金運に恵まれるとか。ご家族で試してみたいかがでしょうか。

節分

は2月3日(土)です。子どもたちと豆まきをして、恵方巻を食べ、今年の健康を祝いましょう。と、はいうものの、ベルギーに住んでいると、大豆を探すのも大変です。豆の代わりに、キャンディーやチョコレートで代用するというのもベルギーらしくていいですね。

もともと節分とは、季節を分ける日のことで、立春・立夏・立秋・立冬それぞれの前日を指し、年に4回ありました。そして、春を迎える立春が1年の始まりとして貴ばれたため、江戸時代以降は、立春の前日の節分を指すようになったようです。立春は太陽黄経が315度の日となり、節分の日付は天体の動きに基づいて変わりますが、日本独特の風習なので、年により変動があっても、旧正月のように日付の違いが世界ニュースの話題にはなりません。

当日は、邪気を追い払うため豆まきをします。これは中国の習俗が伝わったものとされています。一家の長または年男が豆をまくとされていますが、子どものいる家庭では、子どもの大好きな行事となっています。魔目(まめ-魔の目)に豆を投げつけて、魔滅(まめ-魔を滅する)をする。家族一緒に豆まきをして、厄介ものを追い出し、福を迎えましょう。この豆は、生だと芽が出て縁起が悪いので、いった豆を使い、豆まきの後、自分の年の数だけ豆を食べて、無病息災を祈ります。

そして、恵方巻と呼ばれる太巻きを、切らずにそのまま恵方を向いて黙って食べると縁起がいいとされています。恵方巻の発祥の地は大阪ですが、商業ベースに乗って、現在では日本全国に風習が広まっています。今年の恵方は、「南南東」です。家族の健康と繁栄を祈りながら、美味しくいただけてください。厄払いのイワシの料理も忘れずに。

